

樋口芳麻呂氏藏
葉室頼業筆本 『和歌一字抄』 翻刻（六）

日比野 浩 信

（前号の続き）

不一 秋花不一 範永朝臣

三〇 我はなを女郎花こそあはれなれおのへの萩はよそにてもみん

同 經衡

三〇〇 秋くれはち、に心そわかれけるいつれの花もあかぬにほひに

同 國房

三〇〇 色くの花咲けらし秋の野はをく白露の名にやたかはん

義孝 伊勢守

三〇〇 駒なへて野へにたちいて、なかむれは心くくに花咲にけり

俊綱

三〇〇 秋の、に心をみてはすくる哉ひとつ色にし花のさかねは

廣經朝臣（九六才）

三〇〇 あかすのみ妹咲花のみゆる哉いく色になる心成らん

第一 菊花第一 行宗

100 類ありとたれかはいはん末匂ふ秋より後の白きくのはな

不定 尋花處不定 堀河右大臣左

101 おしめ共散もとまらぬ花ゆへに春は山へを栖かにそする

波洗氷不定 俊綱朝臣

102 よしの山つふく嵐に波たかみ汀の氷むすひかぬらん

同座 國房

103 風ふけは波うちとくるうす氷過にし春や水にやとれる

為作 織女雲為衣 隆圓法師

104 たなはたや天の羽衣かさぬらん星合の空のくもりぬる哉」(九六ウ)

如花作垣 俊頼朝臣

105 卯花のかきね成けり山かつのはつきぬ五月にさすさらすけふおとみつるはとみつるは

焮唯作一日 隆資

106 かそふれは秋はけふにてくれぬめり野へのけしきは露もかはらす

露作草葉珠 俊頼朝臣

107 草のはにしはしもとまる玉なれは何をか露にをきならふへき

雪作松樹花 良暹

108 千代をかねのとけきよにし雪ふれは松に花咲宿も有けり

言志 憶牛女言思 堀河右大臣

一〇六 七夕は雲の衣をひきかさねかつきてぬるやこよひ成らん

四 花下言志 三宮〔九七才〕

一〇七 ひかけはふ古木に花も咲にけりいさ老らくのかさしにもせん

二 七夕言志 顕季卿

一〇八 天の河七夕いそきわたさなんあさせたとるもよの更行に

三 同 俊頼朝臣

一〇九 七夕の袖にひまなくつくすみはあふ瀬にけふやあらひ捨らん

即事 七夕即事 資綱卿

一一〇 かつらきの神とこよひの七夕とあくるといつれ歎ますらん

於伏見別業即事 俊綱

一一一 わきもことまつむつことの初にはひとりふしみの里とかたらん

顕実

一二三 あさまたきかしらの霜をはらへ共きえぬは年のつもる成けり〔九七ウ〕

證歌 月日句

一二四 あさ日影にほへる山に照月のあかさるいもを山こしにをきて

茜指イ差月

一二五 初せのやゆつきかしたに我かくしたる玉あかねさしてれる月夜に人みけんかも

暁夕月

一二六 夕月夜あかつきかたイやみあけくれかたのイのあさかけに我身は成ぬ君をおもひかぬ

題不明

1036 あまのはらふりさけみれはしらま弓はりてかけたるよみちはよけん

月人

1037 紅葉するをきになるらん月人のかつらの枝の色つくみれは

月夜宇津呂布「(九八才)」

1038 ますか、みきよき月よのうつろへは思はやます恋こそまされ

松葉月移

1039 松のはに月はうつりぬ紅葉はの過ぬや君にあはぬよおほく

夕月

1040 あしひきの山をこたかみ夕月夜いつかと君を待かくるしさ

月細指

1041 ひさかたの空ゆく月をあみにさしわか大君はかさになりたり

月夜渡

1042 こそみてし秋の月よはわたれともあひみしいもははや遠さかる

萩越蛭

深養父

1043 いくよへて後か忘ん散ぬへき野への秋はきみかく月よを」(九八ウ)

身^二移

善朝臣

1044 秋のよの月のかけこそ木のまよりおちは衣と身にうつりけれ

秋月宿露底

藤景名

白露のそこにひかりはやとれともとまらてそ行秋のよの月

牛女牽渡(マヱ)

あまのかは雫立わたりひこ星の梶音きこゆよの更行は

織女渡

兼輔卿

たなはたのかへるあしたの天河舟もかよはぬ波もた、なん

題不明

あふはかりうれしきことはなけれども別て後そわひしかりけり

雲天飛雲(マヱ)「(九九オ)

久かたのあまとふ雲にあかてしか君にあひみてうつる日なしに

八雲差

人丸

八雲さす出雲のこ、かくろかみは吉野の河の沖になつさふ

雲伊左与布

ひとねろにいはる物からあをねろをいさよふ雲のよそかふまにも

同

人丸

かくれぬのはつせの山のやまきはにいさよふ雲はいもにかあらん

風風色(2)(マヱ)

吹かせのかせのちくさにみえつるは秋の木葉のちれはなりけり

秋木枯(3)

こからの秋のはつかせ吹ぬるをなとや雲井に鷹の音せぬ「(九九ウ)

雨 雨棚引

〔夏〕春雨のたなひく山の桜はなはやくみましを散うせにけり

雨落

〔夏〕時まちておつるしくれの雨やみてあさかの山はうつろひぬらん

秋時雨

〔夏〕おしむらん人の心をしらぬまに秋のしくれと身そふりにける

霞 秋霞

〔夏〕秋の田のほのうへきりあふ朝霞いつれの方に我恋やまん

霞凌木葉

〔夏〕こらか手をまきもく山に春されは木葉しのきて霞たな引

霞居〔二〇〇才〕

〔夏〕かすみゐる富士のたかねにわかへなはいつちへとてかいもかなけかん

霞流

〔夏〕はるかすみなかる、⁽⁴⁾そもに青柳の枝くい⁽⁵⁾持てうくひすぞ鳴

花色同霞

〔夏〕立わたる霞のみかは山たかみみゆる桜の色もひとつを

霧 春霧

〔夏〕春山のきりにまとへるうくひすも我にまさりておもふらんやは

夏晴

二露 あさ芳にやへ山こえて時鳥うの花かきね鳴て過なり

露 春露 遍昭

二露 あさみとりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か(一〇〇ウ)

露寒

二露 秋の夜は露こそことに寒からし草むらことに虫のわふれは

露置積

二露 秋の野にいかなる露のをきつめはち、のくさはの色かはるらん

露布留

二露 空をとふ鳥のつはさのおほひはのいつこもりてか露のふるらん

霜 春霜

二霜 春くればみ草のうへにをく霜のきえても我は恋わたるかな

秋霜

二霜 秋山に霜ふりおほひ木のは散年はゆくともわれ忘れや

霜陰(二〇一オ)

二霜 霜くもりせんとはあらん久かたのよわたる月のみえすと思へは

雪 雪光

二雪 大宮の内にも外にもひかるまでふれる白雪みれとあかぬかも

雪音

二雪 あは雪のほとろくと降りしけれならの都もおもほゆるかな

鶯 鶯妻

〔三〕春されは妻を求とくひすの梢をつたひ鳴つ、もをる

涙 二條后

〔四〕雪のうちには春はきにけり鶯のこほれる涙今やとくらん

笠縫

〔五〕青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花かさ〔一〇一ウ〕

題不明 素性

〔六〕木つたへはをのかはかせに散花を誰におふせてこ、ら鳴らん

雲井鳴 敦忠卿 或本顯忠卿

〔七〕うくひすの雲井にわひてなく聲を春のさかとそ我はき、ける

郭公聲玉越貫

〔八〕時鳥なか初聲はわれみれと五月の玉にませてぬきてん

涕泣

〔九〕聲はしてなみたはみえぬ時鳥我衣手のひつをからなん

猷郭公

〔一〇〕夏山になく郭公心あらは物おもふ我に聲なきかせそ

妻恋〔一〇二オ〕

〔一一〕旅ねして妻恋すれは郭公神なひ山にさよ更て鳴

題不明 侍従佐理

〔五〕五月雨にふりいて、なけとおもへともあすのためにあやめいやねをのこすらん

喚子鳥夜鳴 春道列樹

〔六〕人しれぬねさめの恋はよふことりよふかき聲をきくそかなしき

喚子鳥

〔七〕わか宿の花にな、きそよふこ鳥よふかひありて君も来なくに

馬使

〔八〕春草をまくひの山をこえくれはかりのつかひはやとりすく也

来鳴

〔九〕いもかあたりしけき馬かね此夕きなきて過ぬともしきまてに」(一〇二ウ)

稲負鳥涙 忠岑

〔一〇〕山田もる秋のかりほにをく露はいなおほせ鳥の涙なりけり

千鳥千世と啼

〔一一〕しほの山さしてのいそになく千鳥君か御代をは八千世とそなく

鶴加介留

〔一二〕もかり舟おきこきくらししいもか嶋かたみのうらにたつかけるみゆ

松虫千世鳴 兼盛

〔一三〕千年とそ草むらことにきこゆなるこや松虫の聲には有らん

日久良志来鳴

〔一四〕夕かけにきなくひくらしこ、たくに日こつたぐことになけとあかぬ聲哉

蝦蟆妻呼「(一〇三オ)

㊦ かみつ瀬にかはつ妻よふたくれは衣手さむしつまゝたんかも

鹿来鳴

㊧ わかをかにさをしかきなく初秋の花妻とひにき鳴さをしか

馬鳴

㊨ 衣手をあしけのこまのなく聲も心あるかもつねにけてなけ

梅開雪

㊩ あは雪にふられてさける梅花君かりやはよそへてんかも

猷梅

㊪ 宿ちかく梅花うへしあちきなく待人のかにあやまたれけり

柳青柳

沙弥満誓

㊫ あをやなき梅の花とをおりかさしのみての後はちりぬともよし「(一〇三ウ)

柳機

伊勢

㊬ 青柳のいとよりかけてをるはたをいつれの宿の鶯かきる

櫻照

㊭ あしひきの山へをてらす桜花この春雨に散ぬらんかも

題不明

㊮ 吹かせにあつらへつくる物ならば此一もとはよきよといはまし

山桜栽

遍昭

三〇二 いそのかみふるの山への桜花うへけんときをしる人そなき

躑躅濱生

三〇三 山こえてとをつのはまの岩つ、しわかくるまてはふくみてあらし

句花句「(一〇四オ)

三〇四 白たへにほふかきねの卯花はうくもきてとふ人のなきかな

紅葉句

三〇五 もみちほのほひはしるししかれともつまなしの木をたをりか、さん⁽⁹⁾

宇津呂布

三〇六 もみちは今はうつろふわきもこまたんといひし時のへゆけは

題不明

三〇七 なをさりに秋の山へをこえゆけは錦をきぬにきぬ人そなき

款冬野 伊母に似 家持

三〇八 いもにる花をみしよりわかしめし野への山吹誰か手折し

實不成

三〇九 花さきてみはならずともなるけくにおもほゆる哉山吹の花「(一〇四ウ)

句 永輔

三〇〇 はなのかは一重なるたにある物をやへにそにほふ山吹の花

安知佐井八重開

三〇一 あちさみのやへさくことくやつおにもいまを我せこみつ、忍はん

女郎宇津呂布 貫之

二〇二 たか秋にあらぬ物ゆへをみなへしなと色に出てまたきうつろふ

萩露散

二〇三 このころの秋かせ寒み萩の花ちらす白露をきにけらしも

槿夕發

二〇四 あさかほはあさ露をきて咲といへは夕かけにこそ咲まさりけれ

紫苑（イ）題不明「（一〇五オ）」

二〇五 秋のゝにかせなき露はをきしかとわか紫に花はそみにき

龍膽（イ） 題不明

二〇六 した草のはなをみつればむらさきに秋さへふかくなりける哉

菊散 業平

二〇七 うへしうへ（イ）秋なきときやさかさらん花こそちらめねさへかれめや

菅根乱

二〇八 いなといへはしゐんやはかせすかのねの思乱て恋つゝもあらん

槿葉苔生

二〇九 あたへゆくおすての山の槿の葉もひさしくみねは苔生にけり

花 題不明

二一〇 よと河の水底さへにてるまてにみかさの山はさきにける哉「（一〇五ウ）」

花下紐 藤惟成

三 いつしかとゆきてやはみぬ秋の、のはなの下ひもとけはてぬらん

山 筑波根山

三 つくはねの山の麓にすむ人はこのもかのもに秋をみるらん

河磯

三 さ、なみにうきてなかる、泊瀬河よるへき磯のなきかわひしさ

池磯

三 君か家の池の白波いそによせてしはしはみれとあかぬ君哉

海 輪多之底古久

三 わたの底奥こく舟をへによせんかせも吹ぬる波もたゝすて

浪 水底波

山邊御井(マツ)「一〇六才」

三 水底のおきつしらなみたつた山いつかこえなんいもかあたり(マツ)み

輪多津海手

三 わたつ海の手にまきもたる玉ゆらにいそのうらほにあさる鶴哉

玉劔

三 玉たちをまきぬるいもかあらはこそ世のほかけくもうれしかるへき

弓 弦寸久

三 みちのくのあたちのま弓つるさげかけてひかはか人のわれをことなん

唐梶

三 まくらかのこかのわたりのからかちの音たかしかもあはぬこゆへに

簾 玉垂

三 玉たれのあみめのまより吹かせのさむへはそへていれん思を」(二〇六ウ)

枕 舟路草枕

三 をあをによしならの都に行人もかな草枕旅行舟のとまりつけ南

獨寝 手枕

三 ひとりねの我手まくらをひるはほしよるはくらしうていくよへぬらん

紐 緒

三 白妙のわかひものおのたえぬまに恋結たりあはん日までに

鬢 紫色

三 紫の色のかつらを花かはに今日みん人に後恋んかも

浦邊月 不詠月裏書 定家

三 なみかせのつらきにかへる秋のよをひとりあかしのうらみてそぬる

笠宿 行路裏書 同(二〇七オ)

三 冬の日のゆくかたいそくかさやとり霰すくさは照もこそすれ

湖上冬月 月氷詠 冬裏書 同

三 月出るかたの、あまのつり舟は氷か波かさためかねつ、

古寺残月 以泊瀬山用 古寺裏書 同

三 はつせ山ゆつきかしたにてる月のあくるもしらぬ有明の空

古寺雪 以月兒用寺 裏書 同

三言 うつしける月の御かほはひかりありて軒のあれまにつもる白雪

雖非水邊詠蘆哥 裏書 經信卿

三三 夕されは門田のいなはをとつれてあしのまろやに秋かせそふく

左近中将隆綱

三三 芦のはをかりふくしつの山里に衣かたしき旅ねをそする」(一〇七ウ)

山家暁蛩 俊頼朝臣

三三 あしのやのひまほのくとしらむまでもえあかしても行蛩哉

雜(マヤ) 荒玉月

三三 秋萩の下葉もみちそあら玉の月のつゆけはかせはやきかも

荒玉 無年

三三 またあかぬほとにやかれしあら玉のこひしき影を今夜こそみれ

袖返見夢

三三 白妙の袖うちかへしこふれはかいもかすかたの夢にしみゆる

鼻比見(ハナヒミ)

三三 まゆねかきはなひ、もときまつらんといつしかみんと恋らる、我を

此比 遠地イ 「(一〇八オ)

三三 此ころは恋つ、もおらん玉匣あけてをちよりすへなかるへし

左々波比良 凡以江島構左々波 證哥盡不注之

三三 波さ、波やひらの山かせうみふけは釣するあまの袖かへるみゆ

伊曾神奈良 大輔

三〇いそのかみならのみやこのはしめよりなれにけりともみゆる衣か

敷妙 無枕 藤高經

三一夏のよはあふ名のみしてしき妙のちりはらふまにあけそしにける

敷妙 黒髪 田部忌寸櫛子

三二おきていなはいもこひんかも敷妙の黒かみしきてなかき此よに

用音哥

仁都僧都(マ)

三三けうそくを、しまつきにてまさいませ花の盛を御覽しつゝも」(二〇八ウ)

和音用訓哥

亭子院幸於花之時
遍詠詠之

三四さてといは、いもかしこし花山にしはしとなかん鳥の音もかな

隨便旁詞哥

鹿を
馬と云

能宣

三五なしといへはおしむかもと思らんしかや馬とそいふへかりける

詠物名同物哥

題宮

源忠

三六秋くれば月のかつらのみやはなる光を花とちらす斗そ

犯傍題哥三條太政大臣哥合水上岸邊秋花

兼盛

三七紫の雲とそみゆる月かけに水のおもてる岸の秋萩

憂とつらき

裏音

三八あちきなくつらきあらしの聲もうしなと夕暮に待ならひけん」(二〇九オ)

小侍従

二四 づらきをもうらみぬ我にならふなようき身を知ぬ人もこそあれ

山家秋風

以木枯用
秋同

大宮越前⁽¹³⁾

足引無山

同

菅家

三五 新古

あしひきのこなたかなたに道はあれと都へいさといふ人そなき

雲居与空一首之詠
とをき所に人を、きて

源經基

三六 拾

雲井なる人をはるかに思にはわか心さへ空にこそなれ

天河与空一首に詠 同 清原元輔

三七 天河あふきのかせに雲晴て空すみわたるかさ、きのはし

見るとなかめと 同 躬恒

三八 あひおもはてうつろふ色をみる物を花にしられぬなかめする哉」(二〇九ウ)

堀河院百首同哥 同 紀伊

三九 秋のよの月をはるかになかむれはやそ嶋めぐりみる心ちする

袖と袂と同雖有其例不可詠^{云々} 在子細事也

四〇 古 秋の野の草のたもとかはな薄ほにいて、まねく袖とみゆらん」(二一〇オ)

寛文九年十月書之

頼業(朱丸印)「(一一〇ウ)

注

- (1) 「細」とあるが「綱」の誤。異体字を誤るか。
- (2) 「凡」のような文字。
- (3) 「色」を仮名二文字に誤る。
- (4) 「北」のようにもみえる文字。「と(登)」の上部のみを、一字と誤ったのであろう。
- (5) 傍書、「てうくひす」の右傍にあるが、「くい持て」の異文とみて、位置を改めた。
- (6) 「わ」字、底本「に(尔)」のように読める文字。
- (7) 傍書、「にやねを」の右傍にあるが、位置を改めた。
- (8) 「え」字、「ら」のようにも読める。
- (9) はじめ「か、らん」のようにあり「ら」を「さ」のように直すのが、判読し難い。
- (10) 底本「見」とあり、他の字体とは異なり漢字のようにみえるが仮名としてとらえた。
- (11) 「瞻」字、篇を「目」につくる。
- (12) 「う」「ろ」とも読める文字。「ろ」「か」のようにも読める。他の字形から最も近いと思われる「そ」としておいた。
- (13) 歌ナシ。伝本によって「山里のしつの松かきひまをあらみいたくな吹きそこからの風」(第二句を「しつのをたまき」とする本もある。)が入る。志香須賀文庫蔵日野資時本には本書と同様、歌のみ欠脱している。但し、同類と目される川越図書館本や神宮文庫本には、この欠脱はない。

〔付記〕平成十三年度国文学研究資料館共同研究において「増補本『和歌一字抄』の諸本整理とそのデータベース化」が行なわれており、本書を含む二十本の増補本伝本を対象とし、それらを五類に分類している。データベース化の後には、校本化やデータの公開なども検討される予定であることを付け加えておく。

〔付記二〕共同研究において、本書の翻刻は古瀬雅義氏が担当し、拙稿をも参照の上で、拙稿の誤植などを正したデータを作成しておられる。共同研究成果公刊の後には、そちらをご覧いただきたい。